

子供業務体験を通じた保護者へのかかりつけ機能の啓発

大内 香里¹⁾、池田 汐里¹⁾、小路 麻梨恵¹⁾、玉井 臣弥¹⁾、宗 雄介²⁾、
黒川 由紀子³⁾、石黒 貴子³⁾、前田 守⁴⁾、長谷川 佳孝⁴⁾、月岡 良太⁴⁾、
森澤 あずさ⁴⁾、大石 美也⁴⁾

- 1) 株式会社アインファーマシーズ アイン薬局 行田店
- 2) 株式会社アインファーマシーズ アイン薬局 西新宿店
- 3) 株式会社アインファーマシーズ
- 4) 株式会社アインホールディングス

【目的】「患者のための薬局ビジョン」では、保険薬局に「かかりつけ」「健康サポート」「高度薬学管理」の機能を求めており、2025 年までに全薬局がかかりつけ機能を持つことを目指している。そこで、子供業務体験会が保護者の薬局機能への理解を促す可能性が示唆されたことを受け(本学会第 138 年会で発表)、かかりつけ薬局への理解と活用を促すために服薬一元管理の要素を取り入れた体験会を実施し、その効果を検討した。

【方法】2018 年 7、8 月に、当社が関東地方で運営する薬局 2 店舗で小学生 27 名を対象にした体験会を実施した。保護者の持参する疑似処方箋とお薬手帳を用いて、子供が疑似薬(菓子類)を鑑査投薬する形式とし、「お薬手帳による重複確認」と「状況に応じた医療機関への連絡」について口頭説明した。また、体験会前後で保護者 17 名にアンケート調査した。主な項目は、かかりつけ薬局については「認知度」「活用状況と意識」「求める機能(複数回答可)」、お薬手帳については「利用状況と意識」とした。

【結果】体験会前は、保護者の 70.6%が「かかりつけ薬局」を認知していたが、29.4%しか活用していなかった。しかし、体験会後は全員が「活用してみたい」と回答した。求める機能では、「病院との連携」が体験会前(35.3%)と後(58.8%)で最も大きく変化した。お薬手帳については、体験会前に「家に保管」と回答した保護者(17.6%)の全員が、体験会後に「病院や薬局などに持参する」と回答した。

【考察】本結果から、服薬一元管理の疑似体験を含む子供業務体験会が、保護者のかかりつけ薬局への理解と活用の促進に有用である可能性が示唆された。特に、「病院と薬局の連携」や「お薬手帳の医療機関への持参」の有用性の理解が深まった。今後も子供業務体験会を活用し、地域住民との関係構築と薬局機能の啓発に努めていきたい。

(日本薬学会第 139 年会(2019 年 3 月、幕張)にて発表)